



Title	平安朝詩文の「俗語」
Author(s)	後藤, 昭雄
Citation	語文. 1987, 48, p. 9-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

平安朝詩文の「俗語」

後 藤 昭 雄

はじめに

平安朝の詩人たちは、中国における口語的語彙、いわゆる「俗語」も、その詩集の中に取り込んでいる。それら平安朝詩に用いられた俗語について、これまで積極的に発言してこられたのは小島憲之氏で、その著書、論文における論及⁽¹⁾のはか、直接の専論もあり、それらの中でも多くの言葉が取り上げられてきた。また他の先学による考察、言及もある。⁽²⁾⁽³⁾

しかし、これまでに取り上げられた言葉は、全体の一部にしか過ぎず、なお多くが残されている。これまでの論及は、時代的にいえば、十世紀の初頭、菅原道真の時代までに限られ、以後の詩については全く手つかずの状態に置かれているが、その道真の周辺までに限つても、なお取り上げるべき言葉は少なくない。そこで、一応平安初頭期から十世紀初めまでで区切って、その時代の詩に用いられた俗語のいくつかについて考えてみたい。ただし、「新撰万葉集」中の詩は、多くの俗語を含んではいるが、その作者も、制作年代も明確ではないので、いまは除外した。

なお、詩語と散文語との相違にも留意すべきこと、先学の注意されるところであるが、いまは詩に用いられた言葉であれば、同語の

散文の用例も援用した。

当家

『菅家文草』卷一に「觀三王度園^{ミコトノシテイ}基、獻^{ミタス}聖人」という詩がある。「死一生爭道頻^{アヤシマニシタツシテイ}」は死一生道を争ふこと頻りなり。手談厭却^{ハタハタシテイ}口談の人。殷勤不愧相嘲^{カクシタツシテイ}斥し。漫說^{ハタハタシテイ}當家有積薪^{カツキ}。漫りに説く當家に積薪有りと。結句に「世に大唐の王積薪の墓経一巻有り。故に云ふ」の自注がある。

結句について、日本古典文学大系本の頭注に、「私の家には先祖の王氏の墓の虎の巻があるのでからねとすずろに言いちらしたりする。『当家』は、日本語」という注が付けられている。句の解釈はおおむね妥当であるが、「当家」は日本語、というるのは誤っている。これは道真の誤用すなわち和習ではない。

この語は漢語であり、『詩詞曲語辭匯訳』(卷六)『敦煌變文字義通訳』両著に採録する。そうしてその意味を『匯訳』は猶云本家、或自家、また『通訳』は「本家、自己家裏的、同姓」という。たとえば『通訳』では「搜神記」「田嶋翁」条の

当家地内、有一水池、極深清妙

の例をあげ、

天女称嵐備為池主、可見水池是嵐備家裏所有的

と説明している。すなわち、「当家」は、「その家」あるいは「この家」、また「うちの」「うちの」という意味である。

この詩の場合は、「うちの」という意味になるが、それとともに「同姓」ということでもある。これは『匯詒』の説明の方がわかりやすい。『匯詒』には唐詩から一例が引かれているが、その一つは白居易の詩である。次のようにいふ。

白居易贈楚州郭使君詩『当家美事堆身上、何啻林宗与細侯』此亦猶云本家、以用郭姓典故也。

説明を補うと、白居易の『贈楚州郭使君』に、

当家美事堆身上

何啻林宗与細侯

何ぞ當林宗と細侯とのみならんや

の一聯があり、ここに「当家」の語が用いられているが、それは郭氏に贈った詩に因んで、「同姓」の郭氏の典故を持ち出したことにによる。

林宗は後漢の郭泰、都洛阳に遊び、のち郷里に帰る時には、諸儒の見送る車が千乘もあったが、林宗はひとり李膺とのみ舟に乗つて河を渡つた。人々はこれを見て神仙だと言い合つたという。細侯もやはり後漢の人、郭伋である。彼は循吏として名高く、并州の長官となつて再度赴任した時には、老若が歓迎し、児童数百人が竹馬に乗つて迎えたといふ。詩は、この典故を踏まえて、郭家に関わる美事は何も昔のそうした人々には限らない、いま楚州使君となつて下る郭氏にもそうした美事が多いのだ、という意味である。もちろん後漢の郭氏と楚州使君の郭氏とに系譜上のつながりがある必要などはない。ユーモアである。

道真の詩も同じ構造を持つ。墓を囲んでいるのが王度だから、同じ王姓の墓の神様王積薪を持ち出したのである。この場合も両者には直接のつながりはない。ないにもかわらず、王積薪を持ち出したから、「漫りに説く」というのである。

『菅家文草』にはもう一つ「当家」の例がある。「絶句十首、賀_二諸進士及第」の第三首（卷二）に、

当家好爵有_三遺塵、不_レ若槐林苦出身

の一聯がある。この詩には「橘風を賀す」の注記がある。学生の橋某の文章生及第を祝うものであるから、ここで「当家」は、「この家」あるいは「その家」の意味である。

耶嬢

「耶」は「爺」とも表記されるが、父を、「嬢」は「娘」と表記されることもあるが、母をいう俗語である。「おやじ」「おふくろ」ということになろう。唐詩に次の例がある。

簡簡惜_二妻兒_一爺娘不_ニ供養_一（寒山 我見世間人）

我住在_二村鄉_一無_レ爺亦無_レ嬢_一（寒山 我住在村鄉）

耶嬢妻子走相迷、塵埃不_レ見咸陽橋（杜甫 兵車行⁽⁵⁾）

村南村北哭声哀、兒別_二爺嬢_一夫別_二妻_一（白居易 新豊折臂翁）

平安朝詩では、「文華秀麗集」に用例がある。

独頼_二耶嬢_一偏愛重、何_ニ因見者以_ニ為神_一（菅原清公 奉和春闌怨、卷中）

そうして六朝以来の俗語であること、前掲の杜詩の例ほかをあげて下る郭氏にもそうした美事が多いのだ、という意味である。もちろん後漢の郭氏と楚州使君の郭氏とに系譜上のつながりがある必要などはない。ユーモアである。

『文華秀麗集』にはこの一例のみであるが、この語は空海の詩文に多くの用例がある。そのうちのいくつかをあげよう。

天子剃^レ頭獻^ニ仏歎[、]耶嬢割^レ愛奉^ニ能仁[、]（山中有^ニ何樂[、]『性靈集』卷一）

伏惟[、]先師德下[、]……[、]群品之耶嬢[、]一人之帰馳^{。況復覆我如^レ天[、]載^レ我如^レ地[、]撫^レ我若^レ嬢[、]提^レ我若^レ父^{（為^ニ先師^ニ講^レ祝^ニ梵網經[、]表白[、]卷八）}}

伏惟[、]我皇帝陛下[、]……[、]三界之耶[、]万方之嬢^{（和尚奉^ニ為祈^ニ皇帝^{転^ニ說大般若經[、]願文[、]卷八）}}

唐矣三尊[、]耶嬢六趣^{（彼^ニ修^ニ公家仁王講^ニ表白[、]卷八）}

箇^(个)

『詩人玉屑』卷六に、杜甫の詩における俗語の使用について、次のような論述が見える。

數物以^レ个[、]謂^レ食為^レ喫[、]其近^ニ鄙俗^{。獨杜子美善用^ニ之[。]云[、]}

峽口驚猿聞一个[、]兩個黃鸝鳴翠柳[、]却遙井桐添个个[、]（後略）助教詞としての「个（箇）」を、ものを食う意の「喫」とともに、

杜甫がよく用いた俗語として指摘しているが、この、現代中国語も

そうである助教詞の「箇」は平安朝詩でも用いられている。

まず、人を数えるのに用いた例。その用例をあげる前に、前引の杜詩はいずれも物を数えるのに用いた場合であるから、塩見邦彦氏の指摘を借用して、唐詩のその一、二をあげておこう。

已聞城上三更鼓[、]不^レ見心中^ニ箇人^{（元稹、新政縣）}

不知玉質双棲處[、]兩箇仙人是阿誰^{（貫休、寄^ニ鄭道士^ニ一首）}

本朝では平安初期から用例がある。

千人万人舉不^レ応[、]唯君一箇帝心抽^{（贈^ニ野陸州^ニ歌、『性靈集』卷一）}

吾有^ニ箇瓊枝[、]不幸先露^{（為^ニ酒人内公主^ニ遺言、『性靈集』卷一）}

四)

「瓊枝」は玉の枝、ここでは酒人内親王の皇子をいう。
在^ニ邊亭^ニ賦得^ニ山花[、]戲寄^ニ兩箇領客使并滋三^{（王孝廉、『文華秀麗集』卷上）}

これは詩題である。

吾告^ニ式部卿大藏卿安勅[、]箇親王^ニ也^{（為^ニ酒人内公主^ニ遺言、『性靈集』卷四）}

下つて延喜期に一例がある。

一院群居人七个[、]疑從^ニ天上^ニ斗星投^{（三統理平、秋日陪^ニ左丞相城南水石亭^ニ祝^ニ藏外史大夫七旬之秋[、]『雜言奉和』）}

次に、ものを数えるのに用いた例であるが、これは詩序の中ではあるが、早く『櫻風譜』に用例があるので、挙げておこう。

待^ニ君千里之鶯[、]于^ニ今三年[、]懸^ニ我^ニ箇之櫻[、]於^ニ是九秋^{（藤原宇合、在^ニ常陸^ニ贈^ニ倭判官留在^ニ京）}

以下、平安朝詩の例。

一箇無明諸行業[、]不^レ中不^レ外惑^ニ凡情^{（詠十喻詩、『統性靈集補闕鈔』卷十）}

比來霜雁度千番[、]一箇封書末^ニ曾看^{（巨勢識人、和^ニ伴姫秋夜閨情、『文華秀麗集』卷中）}

試賦^ニ臨年萼[、]仙齡幾箇迎^{（賀陽豐年、詠桜、『經國集』卷十一）}

歲中翫菊過[、]秋深[、]百箇花前久陸沈^{（侍中局賦^ニ秋陽曝^ニ菊花、}

『田氏家集』卷中）

『晉家文章』には五例があるが、いまは一つにとどめておこう。

点檢窓頭數箇梅[、]花時不^レ記幾年開^{（書齋兩日獨對梅花、卷一）}

都盧

豊田穣「唐詩俗語攷」(『唐詩研究』)に採録されていて、その

「葛原詩話」(巻三)では「都來」と同じく「スベテトイフコト」となしてゐるが、当つてゐると思ふ。「都盧」の盧は「都來」の來と同じく單に語尾に添えられただけの助辞であつて、一音節でいへば「都」であり、二音節にのばしていへば「都盧」になる。

という説明が、よくこの語の意義を説いている。『遊仙窟』に二つの用例がある。

遮_レ三不_レ得_レ一、員_レ両都_レ盧失

触_レ處尋_レ芳樹_レ都慮少_レ物華_レ

白居易の詩にも見える。

骨肉都_レ盧無三十口_レ糧儲依約有三三年

「葛原詩話」には、「旧訳ノ般若経ノ内、処々ニ都盧ト云字アリ」とも述べている。私の調査はそこまで及んでいないが、漢訳仏典に口語が多く用いられていることは周知のことである。

我が国では『新撰字鏡』巻十二(二六〇)に「都盧_{同上}」とあり、「同上」は直前の「總豈」に付された訓み「志加之奈加良」を承けるが、この「シカシナガラ」は、逆接の接続詞のそれではなく、「すべて」の意である。

詩文では、早くは菅原道真の文章に用例がある。

一つに「鴻臚贈答詩序」(『菅家文草』巻七)に、

二大夫、兩典客、与_レ客徒_レ相贈答同和之作、首尾五十八首。更

加_レ江郎中一篇、都_レ慮五十九首。

また道真が父是善の命に従つて作った『文德美録』の序文に、

起_レ自_レ嘉祥三年三月己亥、訖_レ于天安二年八月乙卯、都_レ慮九年。

勅成三十卷。

とある。後者について言えば、この部分に当たる所が、他の正史では、

起_レ于天長二年二月乙酉、訖_レ于嘉祥三年三月己亥、惣十八年。拠_レ春秋之正体、聯_レ甲子以詮次。考以_レ始終、分_レ其首尾_レ都_レ為_レ廿卷。(続日本後紀序)

起_レ於天安二年八月乙卯、訖_レ于仁和三年八月丁卯、首尾三十年、都_レ為_レ五十卷。(三代実錄序)

と、「惣」(都)と「字」で書かれていることは、「盧」は接尾辞であつて、一音節でいへば「都」、「二音節にのばして「都盧」となるといふ、前引の「唐詩俗語攷」の説明の正しさを説明するものである。

ついでにいえば、勅撰の正史の序文という、撰者の上首である右大臣藤原基経が陽成天皇に奏上するという体裁をもつ、最も折目正しいものであるはずの文章の中に、道真はこのような口語的語彙を取り込んでいるわけである。

他に、同時代の三統理平に、

幾許群臣呈_レ露胆_レ、都_レ慮万物照_レ秋毫_レ(譽色明_レ遠空_レ)、『類聚句題抄』)

があり、時代が下つて、大江匡衡の詩序に、

左親衛藤中郎将、……、及朝士大夫、夕拜侍中、都_レ慮十有余人、会_レ合于藤亞相別業矣。(夏日陪_レ藤亞相城北山莊_レ同賦淡交唯

對_レ水詩序、『江吏部集』上)

大江匡房に、

五畿及七道、每_レ國祭祀祇、都_レ慮四海内、爭不_レ仰_レ指撝_レ(參安

樂寺詩、『本朝統文粹』卷一)

などの例がある。⁽⁵⁾

一種

『詩詞曲語辞匯』に、

猶云一樣、或同是也。

とある。「同じ」「同様の」の意で用いられる。李白、杜甫以下多くの例が引掲されているが、その一、二をあげると、

一種為人妻、独自多悲憤（李白、江夏行）

一種愛魚心各異、我來施食爾垂鉤（白居易、觀遊魚詩）

我が國では、平安初頭詩にすでに見える。『經國集』に、

忽見三春木、芳花一種催（高村田使、奉和殿前梅花、卷十一）

九區千万里、一種色體體（金雄津、詠雪、卷十三）

『性靈集』に、

夏月涼風、冬天淵風、一種之氣、嘖喜不^レ同（徒懷玉、卷一）

一種阿字多旋轉、無邊法義因茲宣（詠十喻詩、卷十）

河上落花詞）

また、菅原道真の周囲においても、『菅家文草』に六例、嶋田忠臣の『田氏家集』に三例、『雜言奉和』に二例があるが、いまは道真と忠臣の詩一例ずつをあげておこう。

山郵水駅思紛紛、一種風光兩处分（喜田少府寵官歸京、卷二）

數十名駒、一種良、恩頒近侍雁成行（和高侍中鎮夷府貢良馬、數十疋、有勅頒賜、偶題長句、卷上）

以上の諸例、いずれも「同じ」あるいは「同じように」と解すべきものである。

除非

『文語解』に、

俚語ノコレハカクベツト云意ナリ、コノ義ヨリシテ、タダト訳スベキ所オオシ

と述べている。『詩詞曲語辭匯』（卷四）にも、

仮設一例外以見其只有此也。

と説明されている。「ただ……だけ」の意である。そこに挙げられているのは宋以後のものであるが、塩見氏は早く唐詩の例を指摘している。白居易詩にも用例がある。⁽⁶⁾

除非奉^レ朝謁、此外無^レ別牽（朝帰書寄^ミ天八）

除非一杯酒、何物更闕身（感春）

我が國の詩では、わずかに『田氏家集』に次の例がある。

除非鮮服隨饋贈（除非鮮服に饋贈を隨ふるのみ）

自外紛紛俗納牽（自外は紛紛として俗納に牽かる）

（奉^レ和^レ大相立秋日感^ミ涼風至^二詩^三、卷中）

何物

この語については、吉川幸次郎氏に説がある。すなわち、現代中國語では、「など」と尋ねる時に、「甚麼」ということばが普通に用いられるが、その前身に当たるものが、「何物」である。「何物」というい方は、一見、「なにもの」を意味するよう見えるが、そうではない。「なにもの」ではなくして、ただの「など」なのである。……、「物」は軽くそわるだけであって、「物」の字がほかの場合にもつよくな重い意味で使われているのではない。この語は、六朝時代から用いられるが、唐詩においても、初唐以来多用される俗語の一つである。⁽¹¹⁾

我が国では、文章であるが、早く空海に用例がある。

世上強鎮其如妣、人間何物應常存。（孝子為先妣周忌）因寫供養兩部曼荼羅大日經講說表白文、『統性靈集補闕鈔』卷八）

『田氏家集』『菅家文草』に次の例がある。

何物寂寥相待見、香爐煙與水瓶花。（送禪師還山、『田氏家集』卷上）

一年何物始終來、請見寒中有早梅。（晚冬過文郎中院庭前

早梅、『菅家文草』卷一）

子孫何物遺、衣食何備充（舟中行事、『菅家文草』卷三）

以上いずれも、吉川氏の指摘のことく、「なに」と訓まなければならない。

底
『詩語解』卷上に、「甚」とともに挙げ、「俱俚語、何也」という。

「なに」である。本朝の詩では、以下にあげるように、「縁底」（なぜ、どうして）の形で用いられるのがほとんどであるが、その中国詩の例は、『詩詞曲語辭匯』にあげる、王維の「愚公谷」の

縁底名「愚谷」都由愚所成

がある。

我が國では、嶋田忠臣の詩に用いられたのが初例である。「同音

侍郎醉中脱衣贈裴大使」（『田氏家集』卷中）に、

此物呈君縁底事、他時引領暗愁生と見える。以後、平安中期以降の詩人に愛用される。

詩情縁底大蒸仍、蓮府秋池浮月澄。（左相府東三条第同賦『池水

浮』明月、『江吏部集』卷上）

なお、大江匡衡は、別の場でこの句と酷似した句を作っているが、

そこでは、

詩情何事太丞仍、為是郎潛不得昇（李部大卿述沈滯懷忝賜玉章……、卷中）

と、「縁底」に代えて「何事」の語を描いている。

多年稍古属儒業、縁底此時不泰平（一条天皇、書中有往事、

『本朝麗藻』卷下）

閻東陪宴飄清影、縁底遠尋庾亮樓（藤原茂明、賦月、『本朝無題詩』卷二）

本自此身無定体、浮雲縁底慕浮名（藤原通憲、閑中独吟、『本朝無題詩』卷五）

縁底別憂苦、笑因取楷模（藤原敦光、初冬述懷百韻、『本朝統文粹』卷一）

縁底愁病蚕、誰敢食瓊鵝（大江匡房、參安榮寺詩、『本朝統文粹』卷一）

秋風縁底先秋光、扇裡報來斷感腸（藤原憲房、扇裡有秋風、『天喜四年殿上詩合』）

事須

先に「都盧」の語を持つことを指摘した菅原道真の「鴻臚贈答詩序」（『菅家文草』卷七）には、もう一つ俗語が用いられている。

余与郎中相議、裴大使七步之才也。他席贈遣、疑在宿構。
事須別預宴席、各竭鄙懷、面對之外、不更作詩也。

箇点を付した「事須」について、日本古典文学大系本には次の注が付されている。

入矢氏云、事須二字、見于韓愈・白居易文并敦煌變文。即与事須同。事是並接頭語。

中國学の入矢義高氏の示教として、この「事」は接頭語で、下の

「須」を強調するためのものであることが注意されている。従って、

訓読するときも、「一字一語として「事須」で「すべからく」と読む

ことになる。入矢氏は韓愈・白居易の文章、敦煌變文にその用例の

あることを指摘しておられるが、塙見氏の「唐詩俗語新考(三)」に

は、唐詩及び「遊仙窟」の例もあげられている。

本朝の詩文では、道真に先立つて、塙見氏の指摘があるが、空海の『文鏡秘府論』に見える。ここには、その別の例をあげよう。

若五字並輕、則脫略無所止泊處。若五字並重、則文章暗濁。
事須輕重相間、仍須以声律之。(南卷、論文意)

凡一句五言之中而論蜂腰、則初腰、事須急避之。(西卷、文

二十八種病)

詩では『田氏家集』に二例がある。

百菜就中多効力、事須嗜菊得如椿(失題、卷上)

軟脚當帰雲洞裏、事須万歲用仙羞(九日侍宴冷然院、各

賦山人採藥、卷上)

一他

動詞に連接して口語的語彙を作る一連の接尾語がある。「忘却」の「却」、「記取」の「取」などである。これらのうち、殺、得、取、却、来についてはすでに小島憲之氏に論及がある。⁽¹⁴⁾ ほかに「着(著)」があるが、これは見やすい語であるから、いまは取り上げない。ここに取り上げるのは「他」である。

接尾語としての「他」については諸書に言及がほとんど見られない。管見で見いだしたのは、志村良治『中國中世語法史研究』の、「他」にはなお動詞にそい無関心の氣持を伝える独特の機能があ

る⁽¹⁵⁾という言及であった。そこで例として挙げられているのは、「遊仙窟」の

今朝并復隨他弄

王維の「与盧賈外象過崔廸士興宗林亭」の

科頭箕踞長松下、白眼看他世上人

である。

なお、「詩語解」に「他」に「彼」の意があるとして、その例にこの王維の詩を用いて、「白眼にして他の世人の人を見る」と読んでいい。 「他」に「彼」の意味があるというのはその通りであるが、王維の詩をそう解するのは誤りであろう。「無関心の気持ちを伝える」というのは、果たしてそうか、疑問にも思うが、やはり動詞に付く接尾語と見るべきである。

この接尾語として用いられた「他」が、鳴田忠臣の詩に二例見いだされる。「看侍中局壁頭拂紙寫呈諸同志」(『田氏家集』卷上)、タコという珍しい題材を詠んだ詩に、

了得行藏能在我、憐他飛伏必依人

がある。そうしてこの場合、「憐他」が、やはり口語的語彙を作る「得」を添えた「了得」と対語をなしていることが、「他」を接尾辞と考えるべき、見やすい証拠である。

もう一例は、「暮春宴賈尚書亭同賦掃庭花自落」(卷下)の清昼憐看遲日暮、恨他乘醉踏花還

である。

なお、「扶桑集」卷七所収、惟良春道の「野副使卓世之工文者也」

云々という長い詩題の詩に、
看他語艱苦相交、毀譽隨心變羽毛、

の一聯がある。ここに見える「他」について、小島憲之氏は、現代語の「那」「那箇」に当たるとして、上句を「他の詔勅を見るに相交ることに苦しむ」と読んでおられるが、⁽¹⁶⁾ 上述のように、平安朝詩に接尾語としての「他」が存在することを考慮すると、この「看他」もそう理解することもできるであろう。ただし、いまは確かにそちらと主張する自信がないが、その可能性を指摘しておきたい。

このような接尾語としての「他」ということから、「任他」「従他」に思い至る。この二語は從来ともに「サモアラバアレ」と訓みならわされてきてくる。たとえば『文語解』卷四では、他の「従教」「任従」「應対」など十三語とともにあげて、

此皆俗語、詩語ニ用ニ、ソノ義ミナ同ジ、俚語ノカマハヌナリ。
と説明する。「任他」「従他」は固定化して熟語となっているが、語構成を考えてみると、「任」「従」はともに「ゆるす」「まかせる」

「自由にさせる」という意で、それに強意を表わす、あるいはこの場合にこそ、志村氏のいわれる「動詞にそい無関心の氣持を伝える独特の機能」が妥当すると思われるが、その「他」が付接したものであろう。すなわち、「任他」「従他」もやはり接尾語「他」を持つ俗語ということになる。

『詩詞曲語辭匯』(卷一)には、「従他」の例として、李白の「白頭吟」の、

莫掩龍鬚席 從他生綱索

があげられている。他に、塙見氏の指摘を借用すると、次の例がある。⁽¹⁷⁾

無情亦任他春去 不醉爭銷得唇長 (白居易、早夏曉興贈夢得)

任他名利客、車馬闌康莊 (殷堯藩、寄許渾秀才)
従他後人見、境趣誰為幽 (李翹、戲贈詩)

本朝では、まず「任他」は『菅家文草』に一例がある。
森森任他蹠北海、幡幡定是養東膠 (和大使文字之作、卷五)
幸被三君臣交々歎種、任他意氣滿園殘 (九月尽日題殘菊、卷六)
「従他」は『田氏家集』巻上、「病後閑座偶吟所懷」に、

従他軟脚難行歩、只幸凝神不坐馳

やや時代が下つて、『本朝麗藻』巻下の一条天皇、「瑞琴治世音」に、

従他樂府清弦上、至德深仁幾聖朝

と見える。以下の挙例は省略するが、「任他」は、同じ意味の語「應莫」とともに、平安後期には多用されるに至る。

(注)

(1) 『國風暗黒時代の文学』中(中)、『古今集以前』、『白詩の影』(『古今集以後』)など。

(2) 「語の性格—外来の「俗語」を中心として—」(『上代の文学と言語』)。

(3) 松浦友久「不分瓊瑤屑・來霧旅客巾—唐代俗語と平安朝の詩人—」(『漢文學研究』11号)。川口久雄氏による日本古典文学大系『菅家文草』(家後集)の頭注、補注における指摘。金原理「軟脚」考」(『平安朝漢詩文の研究』)、なおこの語については「敦煌變文字義通釈」に論及がある。

(4) 小島憲之『漢語享受の問題に関する論議』(『萬葉語』の場合) (『高野山大學国語國文』3号)。

(5) 杜甫のこの句の口語性を論じたものに、松浦友久「耶娘妻子走相送」(『唐詩の白話的表現と厭戰詩の発想』) (『詩語の諸相』)がある。

(6) 日本書典文学大系本補注。(7) 『唐詩俗語新考(四)』(『文化紀要』(弘前大学教養部) 19号)。

- (8) 我が国の詩文では「都慮」と表記される場合が多い。「文德集錄序」も「慮」に作る何本かがあり、「參安榮寺詩」も「慮」とする本がある（ともに国史大系本頭注による）。一応は『遊仙窟』の例について豊田穰氏が處理されたようだ。「慮の訛であろう」と考えられるが（「唐詩俗語放」「唐詩研究」）、接尾語でもあり、なお考るべき問題のように思われる。
- (9) 塩見邦彦「唐詩俗語新考」〔立命館文学〕⁴³⁰₄₃₁₄₃₂合併号。
- (10) 「六朝助字小記」〔中国散文論〕。

(11) 塩見邦彦「唐詩俗語新考(1)」〔文化紀要〕(弘前大学教養部) 17号。傍記は祐徳神社中川文庫今、山口県立図書館本の本文。

(12) 〔文化紀要〕(弘前大学教養部) 18号。

(13) 注1に同じ。

(14) 同書一〇〇ページ。

(15) 〔國風暗黒時代の文学〕中(上)六六九ページ。

(16)

(17)

(18)

(19)

(20)